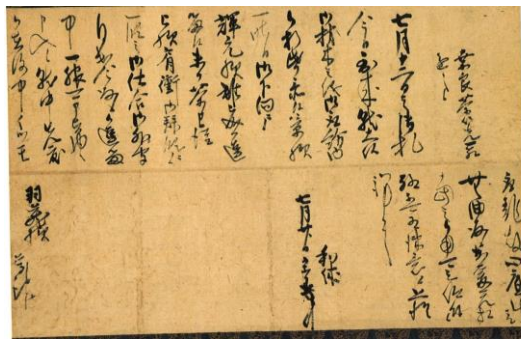


千利休書状について

現在、千利休が吉川広家へ宛てた手紙は二通あります。

一通は当館蔵品で今回展示しているもので、もう一通は毛利博物館に所蔵されているものです。

二通とも軸装で茶掛に使用されたと思われます。ともに広家を茶の湯へ招待する旨が記されています。



(内容)

奈良茶筥一箱進之候

七月十二日之御礼 今日到来 就大仏御材木之儀 御取紛内 御料昏忝候景様 一昨日御下向二候 輝元様 雖被成御逗留候 未御茶申候 従上様肩衝御拝領二候

一段之御仕合 御外聞目出令存候 御逗留中 一服可申旨 内々申入候

就中 先度御在洛中イツモ 取籠故心計ニて無存候 於爰元相当之御用 可被仰付候

聊不可有疎意候 恐惶謹言

七月二十日 利休

宗易(花押)

羽蔵様

尊報

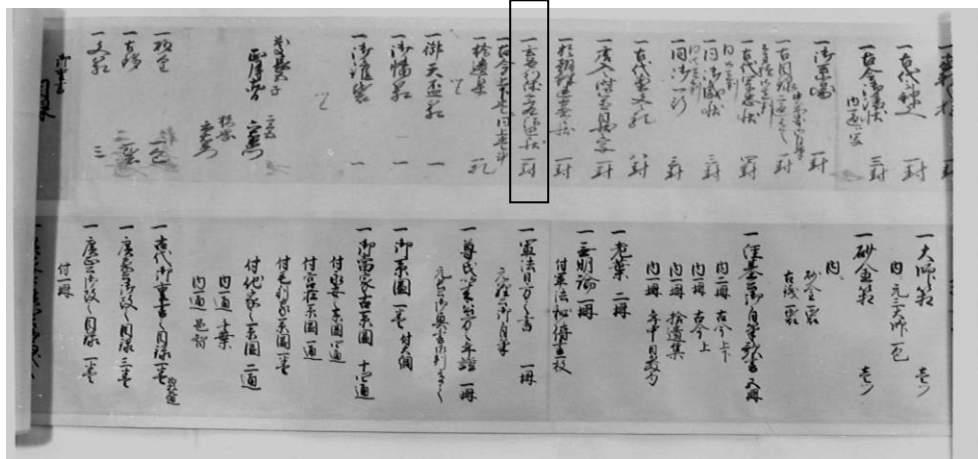
線をひいたところには、上様(豊臣秀吉)より肩衝を拝領しましたこと一段の御仕合で目出たいと書かれています。この肩衝が大肩衝茶入です。



実際、広家は天正十六年(一五八八)の上洛中に毛利輝元にお供して利休の茶の湯に向かっていますので、面識はありますが、利休が天正十九年(一五九一)に亡くなるので、広家との付き合いは実に短いものでした。

それでも利休の書状は吉川家に大事にされてきました。

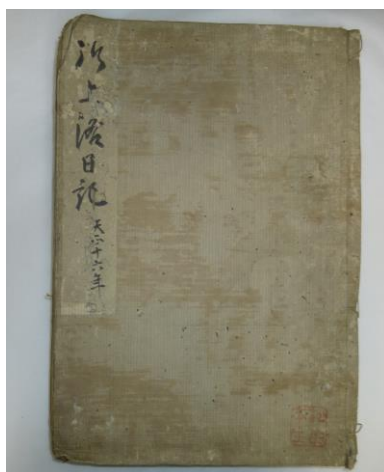
一例をあげると、慶長五年(一六〇〇)正月十四日付の吉川氏重書目録(吉川家文書一三六五)に「二、玄旨利休宗及紹巴の状 一封」がみえ、利休の書状とまとめて三人の人物の名がみえ、その三人とは次のとおりです。



玄旨とは武将で歌人の細川幽齋、宗

及は堺の商人で秀吉の茶頭であった津田宗及、紹巴は連歌師の里村紹巴のことです。三人ともに戦国時代を代表する文化人でした。利休も同等の文化人と認識され、大事に保管していたとみてよいと思います。

さて、広家の天正十六年の上洛については「御上洛記」を参考に記しました。



これは毛利輝元が天正十六年に京都へ出発する七月七日から九月十九日に郡山城へ帰るまでが詳しく記されています。

広家については輝元にお供して茶の湯に出かけたり、能を鑑賞したり、連歌会へ参加したりした事は詳しく記されているものの、広家が秀吉より茶入を拝領した記述は見えません。

館蔵の利休の書状は、大肩衝茶入の伝来が分かる唯一の証拠とされ、ゆえに重書目録にも納められてきたと考えられます。(原田史子)